

長野県立歴史館たより

2014年 秋号 vol.80

特集

秋季企画展

信濃武士の決断



信濃武士の決断 ～信長・秀吉・家康の時代～

戦国争乱の時代、「信濃に本拠地をもつ武士たちはどのように生きぬいたのか」、そして「次の時代にどのように引き継いでいったのか」をテーマに秋季企画展を開催します。

天正3年(1575)の長篠の戦いで織田・徳川連合軍の武田軍に対する勝利を契機に、信長の東国進出は本格化します。天正10年(1582)3月には信長軍は武田を滅ぼし、畿内から信濃・甲斐・上野までの東国支配を実現しました。しかし、同年6月の本能寺の変で信長の支配は崩壊し、三国の支配をめぐって、上杉・北条・徳川の三つ巴の抗争が展開します。信濃武士もこの抗争に巻き込まれ、それぞれが生き残りをかけた戦いを繰りひろげました。

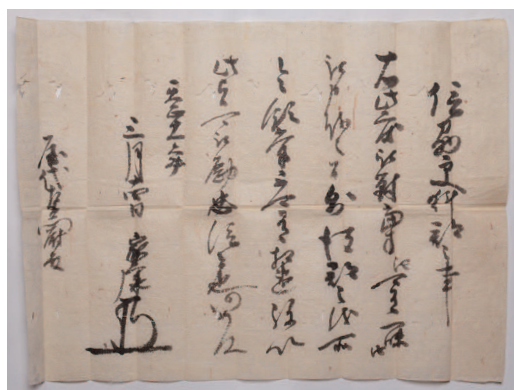
天正10年10月に徳川・北条の和睦が成立すると、信濃は徳川と上杉の攻防の地となり、信濃武士たちはどちらの陣営に属するか、悩むこととなります。

天正13年(1585)には、織田信長亡き後の天下統一の主導権を握った豊臣秀吉が関白になり、全国統一へと突き進みました。翌年、信濃を勢力下としていた上杉景勝・徳川家康が秀吉に臣従すると、信濃は秀吉の影響下となりました。天正18年(1590)の秀吉による北条討伐後、家康は関東移封を命ぜられ、支配下の信濃武士(大名)も関東に移り、信濃には秀吉配下の大名が配置されました。一方、上杉景勝は慶長3年(1598)に会津移封となり、上杉配下の北信濃の武士は彼に従って信濃を離れました。

こうした動向の中で、真田は北条から徳川、そして上杉、さらには豊臣へと主を替え、関ヶ原の戦いや大坂の陣では、両陣営に分かれました。とにかくもこの時代を生き抜き、江戸時代松代藩主

として幕末まで存続したことは有名なことです。が、真田以外にも家の存亡を掛け決断した多くの信濃武士がいました。

今回の展示では、真田のほか、屋代(室賀)・依田などの武士が、歴史の節目でどのような決断をしたのか、その生き様を紹介するとともに、信濃を舞台に多くの武将(大名)が入れ替わったことを紹介します。

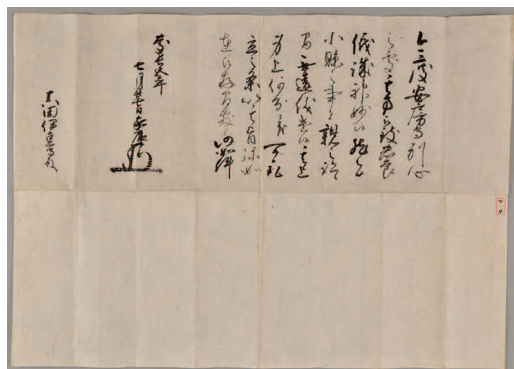


天正11年3月14日徳川家康判物 →家康から屋代秀正に更級郡の支配を安堵したもの
千曲市教育委員会蔵(千曲市指定有形文化財)



卯の花の茶壺
真田宝物館蔵

→秀吉と真田家の強い結びつきを示す



慶長5年7月27日徳川家康判物 →家康から真田信之に小県郡の支配を安堵したもの
真田宝物館蔵(長野県宝)

常設展示室から★秋の展示のみどころ

原始 寒冷化する環境の中で

縄文時代後期（約4,000年前）になると、気温の低下が進んできました。人びとは、住居を南斜面に移し、入口施設を整える（柄鏡形住居）などして、寒さをさける工夫をしました。また、木の実の加工施設や貯蔵施設を充実させ、食料確保に努めました。

土器は用途に適したさまざまな器種が増える一方、飾りは控えめになりました。そのかわり、土偶や石棒など、豊かな生活を願うための祈りの道具が発達しました。



村東山手遺跡
出土の注口土器

古代・中世 屋代木簡の世界

平成6年（1994）、千曲市屋代遺跡群から130点の木簡が出土しました。その多くは7世紀末から8世紀前半のもので、国符木簡、郡符木簡などの当時の命令書や、税などに付けられた荷札木簡が多数含まれています。また、木簡が出土した溝（流路）からは、齋串・人形・馬形・鳥形・舟形・蛇形などの大量の木製祭祀具も見つかりました。これらの展示品をとおして、新しい政治体制がはじまったころの古代信濃国屋代地域の姿を、より具体的に思い描いていただきたいと思います。



屋代遺跡群から
出土した
木製祭祀具

近世 善光寺道名所図会

嘉永2年（1849）、名古屋の書店美濃屋伊六が観光ガイドブック「善光寺道名所図会」を発刊しました。寺社・旧跡・地名・景勝地・街道・宿駅などをやさしく解説し、108点の実景描写の挿絵を入れました。著者は今尾藩（岐阜県海津市）竹腰氏の家臣である豊田利忠です。

自動車がなかった当時の街道の様子はどうなものであったのでしょうか。この名所図会や街道の見取絵図などを展示します。



善光寺宿駅 石堂町から北をのぞむ『善光寺道名所図会』

近現代 満洲移民

長野県は全国で最も多くの満洲移民を送り出しました。今年度はその中から埴科郡・更級郡の様子を展示しています。

更級農学校の教師だった丸田恒雄は、勤労奉仕の学生を引率して2度満洲へ渡りました。彼が現地で残した貴重なスケッチからは、当時の満洲の風景や生活の様子がうかがえます。

満洲埴科郷・更級郷の人びとは昭和20年（1945）8月のソ連軍侵攻により開拓地を追われました。両団は県内でも帰還率の低い開拓団です。逃避行の悲惨な様子が埴科郷の団誌『果てしなく黄色い花咲く丘が』につづられています。



土器の文様を読み解く

下の写真は、長野市松原遺跡から出土した縄文時代前期後半（約5,500年前）の下島式土器で、筒形の胴部に、4単位の山形の口縁部（波状口縁）が大きく開く器形が特徴的です。下島式土器は、甲信地方や関東西部を主な分布域とし、茅野市下島遺跡を標識遺跡とします。深鉢形土器と浅鉢形土器があり、深鉢形土器は、複雑な文様モチーフで飾られるものと単純な文様が施されるのみのもので構成されます。飾られる土器の文様は一見複雑ですが、文様が描かれた順番（施文順序）を読み解くと、いくつかの「きまり」が見えてきます。

初めに描かれる文様は、器面全体に斜め方向や横、または垂直方向の直線文（沈線文）です。この直線文は、二本一対で平行に並ぶ（平行沈線文）ことから、竹管状の工具を半分に割った施文具（半截竹管^{はんさいちくかん}）で描かれたものと考えてよいでしょう。下の土器は、全体に横方向の平行沈線文が施されていますが、土器によっては、いくつかの方向の平行沈線文を組み合わせているものがあります。方向の変換点は、後に描かれる文様の範囲の境界線や器形の変換点と合致することが多く、全体的なデザインの基礎をなしています。

次は、細い粘土紐を器面に貼り付け、その上を半截竹管で連続して押し引きする文様（結節浮線^{けっせつふせん}文）です。加飾のためだけでなく、器面と粘土紐の結着をより高める目的もあったと考えられます。結節浮線文は土器の上半部に施されるものと土器全体に施されるものがありますが、いずれの場合でも、初めに口縁端部と胴部に施し、渦巻きなどの主要モチーフを描く範囲を確定させています。これは、下島式土器の施文順序の原則で、同時期の諸磯C式土器（関東地方が主要分布範囲）にはみられません。

結節浮線文をよくみると、横方向ものは左から右に、縦方向のものは上から下に半截竹管で押し引かれていることがわかります。これは、身体の動きを考えれば、土器製作者が施文具を右手に持って文様を描いていたことを示しています。しかも、文様を描く位置は、土器製作者の目の高さくらいが最も描きやすく、そのためには土器を何らかの台の上に載せていたことが想像されます。まさに土器製作者は土器と向き合って作業していたことでしょう。縄文土器の躍動的な造形・文様や力強さの一因は、こうした土器の作り方が大きく反映していると考えられます。



下島式土器



結節浮線文

文献史料をよむ 絵図が語る世界



「越後国瀬波郡絵図」(重文)の一部 (米沢市上杉博物館蔵)

1枚目の写真は米沢市上杉博物館にある、戦国時代の終り頃、上杉景勝の領国で作られた「越後国瀬波郡絵図」(重文)の一部です。村や城と、それらを繋ぐ道が克明に描かれていることから、中世の絵図に関心がある人には知られた史料です。この絵図の作成目的には諸説がありますが、上杉氏の軍事動員体制に関連するとみられています。紹介した部分は、新潟県北部で国の名勝および天然記念物に指定されている「笹川流」で、軍事とはあまり縁がなさそうな場所ですが、切り立った奇岩の岩壁と沖の栗島が丁寧に描かれています。

通常、古文書や絵図などは、目的をもって作成されますが、その際「絵図」の類には、作成者の意図と無関係な情報も多量に紛れ込みます。笹川流の沖にある栗島は中世には有名な霊場でしたから、本土側の奇岩もなにかしらの心性にもとづいて、細密に描かれたものでしょう。対になる「頸城郡絵図」にも古来の霊山である「米山」が丁寧に描かれています。絵図本来の目的はともかく、これらの描写からは、中世越後の自然観や信仰の一端をうかがい知ることができます。

18世紀以降になると、絵図(地図)の土台にある「考え方」とともに、測量・描き方などの「技術」も見どころになります。これは「地図の技術史」と言える側面ですが、長野県立歴史館には整理中のものも含めて数千点もの絵図・地図類がありますから、これらを大きな史料群ととらえれば、そこからはさまざまな歴史像が浮かび上がるでしょう。

2枚目の写真はその一例で、明治初期の米子村(現須坂市)の絵図の一部です。右端が「米子の滝」として知られる「権現滝」「不動滝」ですが、これらの滝の土台となっている厚い溶岩層から多数の滝が落下して瀑布群が描かれています。実は、絵図の右側にあたる須坂市亀倉に残る別の絵図にも多様な情報が描き込まれており、調査によって景勝地として知られる米子の滝の新しい貌が明らかになりつつあります。



「米子村全図村誌附属見取図面」の一部 (当館蔵)

当館では平成26年度から、測量の専門家を交えた共同研究で、明治初期に成立した町村絵図の調査研究を始めようとしています。成果をご報告できるのは来年以降ですが、みなさんも、ぜひ魅力的な絵図の世界を楽しみにおいでください。

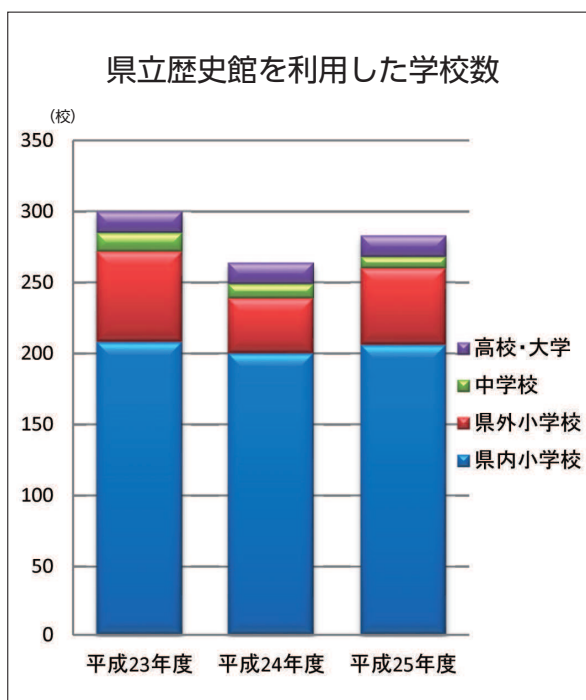
ようこそ 県立歴史館へ

年間280校・2万人の 学校見学

東京都からも学校見学が

当館では、個人・団体、幅広い年齢層で多くの皆様にご利用いただいています。1年間で約9万人の来館者がありました。中でも学校による見学者が多く、今年度も毎日のように児童・生徒の皆さんでにぎわっています。

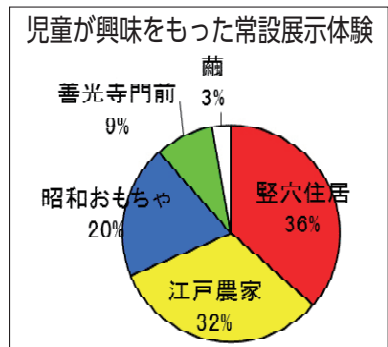
昨年度は約280校、2万人の児童・生徒による見学がありました。特に多い見学者は、長野県内の小学校6年生です。6年生の社会科では日本の歴史を学びますが、それに合わせて当館を有効にご利用いただいています。県外では東京都の学校が多く、長野県での宿泊体験的学習(移動教室など)に合わせてご利用いただいています。



月別の利用では、5月が圧倒的に多いです。歴史学習の導入段階として、概要把握やきっかけづくりとしたり、遠足と兼ねたりしています。6～9月は東京都の学校利用が目立ちます。

見て、ふれての体験が魅力！

先生方にご協力いただいたアンケート調査では、総合的な満足度が「大いに満足」「満足」の評価をいただ



いています。その理由の多くは、体験的な学習と児童・生徒の興味をそそる解説です。

バックヤード探検(考古収蔵庫見学)は、一人ひとりが土器・石器を持ったり、本物の人骨を間近に見たりする体験活動で、多くの学校から大好評です。常設展では、縄文の竪穴住居に入って毛皮にさわる、江戸時代の農家にある35kgの肥桶こえおけを担ぐ、みの蓑を着る、昭和のおもちゃ(コリントゲーム等)で遊ぶなどが特に人気です。

教室の授業ではなかなか難しい本物体験・疑似体験や当館職員による解説によって、歴史学習を深め、広めていただいています。「やはり本物は貴重です!」「子どもたちの興味をかきたてるものばかりでした。」「授業や教科書では知ることができないとらえ方や事実等を教えていただきました。」等の声をいただきました。



満洲移民は避けられなかったのか

常設展示の「昭和恐慌と満洲移民」コーナーを全面改訂しました。満洲移民に特化した展示を行います。

長野県から満洲に渡った開拓民は、3万3千人余と言われています。2位の山形県の2倍に上ります。なぜ長野県は多くの開拓民を送り出したのか。謎は解かれていません。当時、本県は農家一戸あたりの耕地面積が小さい上に、現金収入が期待できる養蚕業に偏重していました。水田や畑を桑園にし、自家で消費する米すら購入している状態でした。恐慌に伴う繭価の大暴落で多額の負債を抱えることになりました。窮乏する農村を立て直す切り札として、移民政策が強力に推進されたと言われます。

しかし、村を立て直そうとする活動、「農村更生運動」が、最初から移民を前提にしたわけではありません。信濃海外協会や教育界では移民奨励の論調はありましたが、多くの村は移民ではない方法を模索しています。更生運動自体は官製運動ですが、村民は多額の負債と養蚕業に展望が見いだせない中で、村の行く末を真剣に論議し、更生計画を策定しています。肥料、品種、栽培方法の見直しによる農作業の効率化、自給化、特産物の開発も手がけています。家計簿記帳を奨励し、ルーズだった金銭感覚を改めようともしています。

下伊那郡三穂村（現飯田市）の三年間禁酒運動は、全国にも知られました。

更生運動を遂行するため、村の中に農会や産業組合など上意下達組織が作られました。これが戦時下では国民総動員や移民送出の母体になったことは確かです。更生運動は一面では郷土の歴史や文化を学ぶ教育運動でしたが、「郷土を愛すること」が「国家を愛すること」にすり替えられたことも事実です。更生運動を手放しに評価することはできません。

村民が自分の村は何が問題か、どうすれば苦境を乗り切れるのか真剣に考えようとした瞬間があったことを評価することが大切です。大正期の教育の質の高さも評価される必要があります。

敗戦からたくましく復興する日本社会の姿を描いたジョン・ダワーは、次のように述べています。

「日本は、世界に数ある敗北のうちでも最も苦しい敗北を経験したが、それは同時に、自己変革のまたとないチャンスに恵まれたということでもあった。「よい社会」とは何なのか。この途方もない大問題が敗戦の直後から問われはじめ、この国のすみずみで、男が、女が、そして子供までが、この問題を真剣に考えた。」（『敗北を抱きしめて』から）

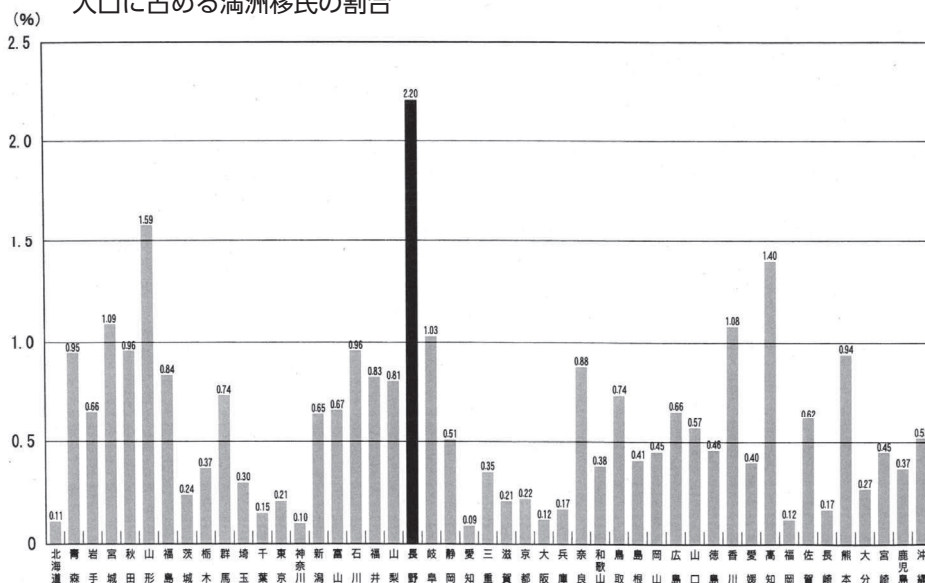
「敗戦」という言葉を「恐慌」に置き換え、昭和初期に県内各地で進められた農村更生運動を、

満洲移民前史としてではなく、村民が何を願い、何を学び、壁をどう打ち破ろうとしたのかという観点から、その到達点と限界を明らかにしてみたいと考えます。この作業は、「村を救済するには満洲移民しかない」という言葉が、もしかして意図的に作り出されたもの、農民を作為的に誘導するシナリオだったのではないか、つまり「満洲移民は避けられたのではないか」という問いに答える作業だと考えます。

（青木 隆幸）

長野県は満洲移民送出日本一

人口に占める満洲移民の割合



（出典：蘭 信三『「満洲移民」の歴史社会学』行路社）

INFORMATION

インフォメーション



■平成26年

9月～12月の行事予定

9月

秋季企画展

休館日
1・2
8・16
22・24
29

信濃武士の 決断

—信長・秀吉・家康の時代—

9/27(土)～11/9(日)

講座

9/27(土) 午後1時30分～
「信長・秀吉・家康と
信濃武士」

講師 当館職員

ギャラリートーク

10/5(日) 10/19(日)
午後1時30分～午後2時

講演会

10/25(土) 午後1時30分～
「織豊時代の終焉と
天下統一」(仮)

講師 井原 今朝男 氏
(国立歴史民俗博物館名誉教授)

イベント

10/26(日)
午後1時30分～午後4時30分
「屋代城に登ろう」
(千曲市教育委員会後援)

10月

休館日
6・14
20・27

11月

休館日
4・10
11・17
25・26

冬季展

縄文土器展

デコボコかざり のはじまり

11/29(土)～2015年2/1(日)

講座

11/29(土) 午後1時30分～
「立体的な土器装飾のはじまり」
講師 当館職員

12/20(土) 午後1時30分～
縄文風クリスマスリース・
ゾートロープを作ろう

12月

休館日
1・8
15・22
26・31

講座・イベント

古文書講座(通年受講生)

第4回 初級A 9/7(日)
初級B 9/18(木)
中級A 9/6(土)
中級B 9/18(木)
第5回 上級 9/27(土)

第3回考古学講座

9/20(土)
「縄文時代における石積みの文化」
講師:当館専門主事 寺内隆夫

大人の遠足 講義①

9/25(木) 於:松本市
「大鹿村の自然と暮らし」
講師 当館学芸部長 市川正夫

古文書講座(通年受講生)

第5回 初級A 10/5(日)
初級B 10/16(木)
中級A 10/4(土)
中級B 10/16(木)

大人の遠足 講義②

10/2(木) 於:松本市
「大河原・鹿塩の歴史と文化」
—中央構造線沿いに広がる文化をたずねる—
講師 当館総合情報課長 福島 正樹

大人の遠足 現地見学

10/9(木) 於:大鹿村
「南朝の拠点、大鹿村(大河原・鹿塩)をたずねる」

遺跡探訪会

10/18(土)
甲府城跡と山梨県立考古博物館
を訪ねる

史料保存活用講習会

10/24(金)

考古資料保存処理講習会

11/14(金)

やさしい信濃の歴史講座

『善光寺道名所図会と
街道の風景』

①12/6(土)

②12/13(土)

表紙写真の説明

いくさしょうぞく きょうかたびら

《屋代正長 長篠合戦軍装束・経帷子》

現在の千曲市屋代の地を根拠としていた戦国武将屋代氏は、長篠合戦で戦死した正長が着用していた経文を全面に書写した軍装束を、軍功を示す家宝として江戸時代を通じ大切に伝えた。同氏は、武田・上杉・徳川と主家を変え、江戸時代初めには大名、のち旗本として生き抜き、明治維新後徳川慶喜に従って静岡に定住した。



行事アルバム



館蔵品展「歴史に煌めく日本の美」—信濃を彩る名品たち—
6月14日(土)館蔵品展オープン初日に「日本美術のオリジナリティ」と題し、矢島 新氏(跡見学園女子大学文学部教授)にご講演いただきました。信濃を彩る名品たちを中心とした日本美術の奥深さ、独特の世界観などについて熱心にご講演いただきました。



夏季展「山とともに生きる」—「信州 山の日」制定を記念して—
7月26日(土)から「信州 山の日」制定を記念して夏季展「山とともに生きる」が開催されました。オープン初日は「飯綱信仰について」と題して、いづな歴史ふれあい館学芸員小山丈夫氏にご講演いただきました。

長野県に暮らす人びとにとって山は物質的な資源にとどまらず、信仰や登山など精神的な資源としても活用されてきました。大勢の来館者が県民共通の財産として守られてきた山に関わる展示資料を熱心に見入っている姿が印象的でした。

長野県立歴史館たより 秋号 vol.80

平成26年(2014) 9月3日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ http://www.npmh.net/

印刷 奥山印刷工業(株)